洛友會報

京都大学工学部電気系教室内
洛　友　会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
075-753-5270
www.rakuyukai.org

生物時間と文明時間

平23年度東京支部長　塩見　正（昭45年卒）

人間ならでは

コンピューターがネットワークにつながり、それがスマートフォンとして個人の手の平に乗る時代になってきた。私たちをとりまく情報環境はこの10年くらいの間にも劇的な進展を遂げている。これは一つの象徴で、人類はこの100年くらいの間に急速に新しい技術を開発し、それに歩調を合わせるように地球上の人口が指数関数的に増大している。100億人とも言われる惑星地球の人間収容能力を今にも超えてしまいそうである。

しかし、我々の回りでは、依然として戦争や抑圧、飢えと貧困、犯罪や虐待などなど、科学や技術の発展に対して、人間は果たして賢くなっているのだろうかと疑問を抱かせることが多い。もちろん、私たちは、社会のあらゆる側面で個々の人間や組織のすばらしい活動や能力に感動させられる。2011年3月の東日本大震災で大被害を受け、いまなお苦境にある人々の復興への力強い歩みや、国内外のあらゆる人々の支援、人々の絆は世界を感動させている。スポーツや芸術、科学技術で世界のトップを行く個性に拍手を送り勇気をもらう。

欲望も殺し合いも結局は人間ならではのことだ、その中でどのように生きるのかが問題なのだと言えそうだが、世の中の先端と人間ということについて少し考えてみたい。

二つの時間

類人猿型の生物があるとき急速に大脳を発達させた。そして人類が生まれた。人類は他の動物には見られない二つの時間の流れを持っている。一つは生物時間である。遺伝子システムに基づいて生物としての資質の継承と進化的展開が起こる時間の流れである。もう一つは、生物の外部の記憶と継承のシステム、ますます大規模に蓄積し、発展する文明の時間的流れである。

この二つの時間の流れには大きな違いがあると気づく。生物時間は数十億年の地球史の時間の流れに対応している。人類については十万年から百万年くらいの尺度でみるべきであろう。遺伝子交配の世代交代でいうと数百から数千世代ということになる。だとするとここ数千年くらい（せいぜい200～300世代）では時間的にも空間（地理）的にも起きる変化は小さい。この程度の時間スケールの中では、いろいろな人間集団や個人の間での喜怒哀楽、恨みや懐疑、愛や憎しみの構造には大きな違いが生じない。実際、数千年前の古典文学が現代人にも通じる。脳の生物学的な構造や機能、容量がこのくらいの時間尺度ではそれほど変化しないからだ。文明による道具立ては異なるにしても。他方、文明時間の流れは、もっと短い尺度で、かつ加速度的である。地理的にも多様になる。生物時間を律するのは基本的には遺伝子システムであるのに対して、文明は生物外部の仕組みにより発展し、その継承は加算的・蓄積的である。ここに二つの時間の違いの理屈がある。

食い違いと乖離

「人間ならでは（人間らしさ）」は、多分に生物時間を基礎としている。複雑高度に発達した人間の脳の中でも、内部の生命中枢に近い辺縁系あたりが好悪や恐怖など、もっとも基本的な情動機能を担っている。このような機能はもっぱら生物時間で働いていると考えられる。他方で、文明時間は流れの尺度は短く加速度的で、千年から百年、そして十年（十年一昔）である。そして空間的に多様である。現代文明の最先端はいわばピラミッドの頂上のようなものである。人類のもっとも優れた発展の先端だけを見ていると頂上しか見ないことになる。ピラミッドの下層の膨大で多様な内容を見過ごしてしまいかねない。

科学技術に立脚する生産と流通、産業と交易、これらのインフラにもトップ10％があるかと思えば、その下には下層の90％がある。社会の運営システムについて言えば、人類は最後に「リベラルな民主主義社会」に到達した（フランシス・フクヤマ）という。古代のまつりごとのシステムから、中世、近世、近代と政治システムとその基礎となるイデオロギーも展開してきた。それでも世界には独裁も専政も身近にもあり、今でもピンからキリまである。

文明時間にも生物時間に近い流れから、これと大きく乖離した科学技術の最先端の流れまであるとみる方が適切だろう。人類が、進展を続ける生産様式・産業経済の規模と構造に社会の運営システムをうまく適合するよう発展させているかというと疑問である。生物時間と文明時間、そして文明時間の中にいろいろな食い違いも乖離もありそうである。

攪拌と侵襲

生物時間の中でも文明時間の中でも絶えず変化と攪拌が起こる。生物のシステムでは世代交代や突然変異のプロセスが重要である。文明は空間的にはいわゆるグローバリゼーションによって攪拌（あるいは侵襲）される。これを文明のブルドーザー効果と言った学者

（村上）がいる。例えば頂上の10％が残る90％をブルドーザー効果で均してしまうというのだ。無理に均すところに問題が起こる。自給自足で平和に暮らしていたある部族のところに外部から貨幣経済の仕組みがもたらされた途端に貧富の差が生じ、その社会の基盤が覆されるようなものである。

異文化理解

京の人が「先の戦で街が焼かれて」と言うと、それは応仁の乱のことだったという話がある。この感覚が実は正しいと思われる。幅のある文明時間でも生物時間に近いところが人間の心や生活にとって重要で、それによると千年や2千年ではついこの前のことだからである。異なる時間の流れの理解が大切である。これも一種の異文化理解である。科学技術の世界にのみ深入りしているとこの感覚が狂ってしまう。

より進んだ科学技術で人類の問題を解決しようとするのは間違いではないし、それに向かって人生の目標を設定するのもよい。再生医療で革新的な医療をめざすのもすばらしいことである。同時に人類としては、生物時間と文明時間というものにもっと大脳を使うべきであろう。「愚者は自らの体験に学び、賢者は歴史に学ぶ（ビスマルク）」という。大学やその前段で科学技術の基礎と最先端を学ぶことは大事だ。同時に、我々が生物から人間の社会的活動へとたどってきたもっとも基本的な時間の流れに即した歴史に学ぶべきであろう。大学教育で言えばリベラルアーツがそれに当たるかも知れない。昨今の大学院教育のプログラム設定において視野の広いグローバルに活躍できる人材の育成に一つの焦点が当てられている。異なる時間の流れの観点も重要ではないだろうか。いまさらながら思い至った次第である。

教室だより

2011年度研究室対抗野球大会閉幕

25チーム（28研究室）が参加して昨年5月から行われてきた研究室対抗野球大会が5月8日をもって終了しました。5月14日に表彰式が行われ、優勝した土居研究室の代表者に洛友会より寄贈された優勝カップが授与されました。なお、準優勝は松山研究室、3位は佐野研究室及び水内研究室合同チームでした。

佐野研究室 M2　杉本幸薫　記

優勝した土居研究室

本部だより

洛友会本部役員会報告

平成24年度役員会は、去る5月20日（土）正午より、長尾会長、新旧4副会長、9支部長（東京支部と東北支部は代理）、新旧幹事長、本部役員の合計21名の出席を得て開催されました。役員会は、会長の開会挨拶の後、木村幹事長の司会で議題の審議に入りました。

まず支部活動の状況説明が各支部からなされました。新たな活動として、東京支部から講演会や拡大クラス会などの活動が、関西支

平成24年度 懇話会 開催のご案内

在校生（学生会員）と卒業生（正会員）の親睦をはかり、在校生に先輩からのメッセージを伝えて激励するために、洛友会と電気系教室との共催で懇話会を毎年開催しています。今年度は左記のように開催されますので、奮ってご参加下さるようご案内いたします。

記

日　時：平成24年10月12日（金）　14時30分～19時30分
場　所：吉田キャンパス総合研究8号館3階 NSホール
懇親会：生協吉田食堂（旧教養部）

プログラム（予定）：
14時30分～　開会挨拶
（電気電子工学科 学科長　小野寺秀俊 教授）
14時40分～「超電導のための極低温環境
（液体ヘリウム・液体水素の不思議な世界）」
塩津正博先生（京都大学名誉教授・昭41年卒）
15時30分～「北極と南極の大気から見た地球環境変動」
矢吹正教先生（生存圏研究所・推薦会員）
16時20分～　休憩
16時30分～「日本の宇宙開発と技術」
小澤秀司氏（宇宙航空研究開発機構・昭46年卒）
18時00分～　懇親会（生協吉田食堂1F）
（会費：社会人3、000円、学生 無料）

連絡先：電気電子工学科事務室　長谷川　智子
電　話：075―753―5273
FAX：075―753―5271
Eメール：konwa-kai@kuee.kyoto-u.ac.jp

部から異業種交流会が、九州支部から昼食会などの活動が紹介されました。続いて、平成23年度事業報告と同決算、役員の改選、平成24年度事業計画と予算案が審議承認されました。20年の長きにわたり、洛友会を支えてこられた木村磐根幹事長が退任され、荒木光彦新幹事長と交代されます。また、平成24年度は、洛友会設立60周年に当たることから、木村幹事長の提案で、25年4月発行の洛友会報を60周年記念会報とすることが決定されました。最後に事務局から、名簿の電子化を検討する必要があることが説明され、東京支部・関西支部とも連携して検討を行うことになりました。

事務局　記

推薦会員

（平成24年5月20日承認）

・土井俊哉　教授
エネルギー科学研究科
（京大　冶金学、昭60年博）

・石原亨　准教授
通信情報システム専攻
（九州大、平12年博）

・中尾恵　准教授
システム科学専攻
（京大　情報学、平15年博）

・矢吹正教　助教
生存圏研究所
（千葉大、平15年博）

洛友会本部総会報告

平成24年度本部総会は5月20日（日）、京都タワーホテルにおいて、関西支部総会に引き続いて開催されました。本部、支部会員50名の出席がありました。

長尾会長の開会挨拶の後、木村磐根幹事長の司会で、第1議題の平成23年度の事業報告と決算が審議・承認されました。第2議題は幹事長の退任でした。20年の長きにわたり、洛友会活動を支えてこられた木村幹事長が退任されることになり、出席者の感謝の拍手で承認されました。なお、木村名誉教授は幹事として引き続き洛友会活動にご尽力いただきます。第3議題は役員の改選で、新任の幹事長は荒木光彦新幹事長が承認されました。電気系教室代表の副会長は、松重名誉教授から松山教授に交代することが承認されました。第4議題からは、荒木新幹事長の司会で、平成24年度事業計画と予算が審議・承認されました。名簿が発行されるほか、学生と企業との交流会は12月8日（土）開催となりました。また、洛友会事務局が、桂キャンパスから吉田キャンパスに移転することが報告されました。最後に小野寺幹事（電気電子工学科長）から電気系教室の現況が紹介されました。電気総合館に耐震補強工事が施されること、2名の研究科長（北野工学研究科長と佐藤情報学研究科長）はともに電気系教室出身であることなどが紹介されました。

高等専門学校に6年間勤務して

新幹事長　荒木光彦
（昭41年卒）

私は、本年3月まで松江工業高等専門学校校長を勤めていました。高等専門学校（以下、高専と略称）卒業生は同世代人口比1％弱で、世の中の少数派です。しかし、技術者というグループで大雑把に概算してみると、その割合は10％程度に達しますから、絶対少数というほどではありません。また、高専卒で、各所で重要な役割を演じてきた、または現に演じている技術者・研究者が少なからず存在します。皆さんの中にも、同級生に高専からの編入生がいたとか、職場に高専卒の同僚が～、という人がいるでしょう。にもかかわらず、高専という学校種の存在感は、世間一般としてかなり希薄です。年末にNHKで放映される高専ロボコンが一時かなりの視聴率でしたが、最近は低下気味だそうです。そして、何よりも、子供の進学先として高専を考える親の比率が、特に大都市で圧倒的に低いように思われます。進学ガイダンスのとき、有名大学進学を目指すか、スポーツや音楽などでの活躍か、それとも両方のバランスを重視するか；大学までの一貫教育の道か；公立か私立か共学か女子（男子）校か、といった選択肢は提示されても、「中学校卒業後高等専門学校へ進学して将来は技術者になる」という進路が明示されることは少ないように思います。何故かよく分かりませんが、多分一つには技術者の存在を忘れ軽視してしまう歴史的風潮（技術が大事と言いながら、給与面では、同程度もしくは同程度以下の修練で務まる他職種より一段と低いのが明治以来の伝統？）、そうしてもう一つに高専関係者が大人しくて高専、高専と声高に発言しないことによるのではないかと思います。そこで、高専校長に着任早々、「技術者の姿：技術立国を支える高専卒業生たち」という本を企画し、２００７年11月に世界思想社から刊行しました。以下では、6年間の経験を加えながら、高専制度の発足と変遷を紹介させていただきます。洛友会の中にも退職者・現役を含め高専校長他関係者が多数いらっしゃる中、少々おこがましいと思いつつ筆をとるものです。

高専制度は１９６１年の学校教育法改正で誕生しました。その目標は「所得倍増計画期間内に見込まれる技術者の不足を解消する」ことであり、その位置づけは「中級技術者を多量に供給し得る新しい学校制度」というものでした。ただし、その裏では、「終戦後に行われた教育制度の改革のなかには、国情を異にする外国の諸制度を範とし、いたずらに理想を追うに急で、我が国の実情に即していないと思われるものも少なくなかった。」と現行の六・三・三・四教育制度に対する批判が展開され、「学校体系の画一化の打破」という目的が掲げられていました。その結果、設立時において、

（一）名称を「高等専門学校」と称し、大学とは別個の高等教育機関とする。

（二）修業年限を5年一本にし、前期・後期の区別はつけない。教育課程、教員組織についても「前期3年は高等学校に準ずる」という考え方は〝とらない〟。

（三）「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成する」ことを目的とする専門職業教育機関であることを明確にする。

という3点が強調されました。

先走りますが、ここで、以上の諸点が制度成立後50年を経てどうなったかについて、私見を述べてしまいましょう。まず「中級技術者を供給する学校制度」ですが、実務に耐え得る技術者群を安定的に供給する教育機関という立場は設立以来不変です。実際、求人倍率が高専全体平均で5倍を下回った年がほぼ皆無であることから、多くの企業が高専教育を正当に評価していると考えられます。ただし、就職した者が中級技術者に留まるかというと決してそうではありません。前期の書物でも紹介していますが、指導的立場に登る卒業生が数多く現れており、〝中級技術者養成に特化した学校〟という位置づけはもはや過去のものです。「（一）、（二）、（三）の3点」については、実際上必要な修正を受けながらも基本姿勢として制度的に維持されています。「学校体系の画一化打破」ですが、狭いながらも六・三・三・四制と異なる路を開いたことは一定の成果に違いありません。ただし、先に述べたとおり、その一般的認知度が低いので、〝打破した〟とまで言える状況でないと考えます。むしろ、昨今各所で打ち出される大学改革案を、高専制度も含めた視野から眺めれば、ほとんどが甘やかされた環境内での〝改善〟であり悪くすれば〝締め付け〟にすぎないもので、〝改革〟には程遠いと言えます。この観点から、「画一化された六・三・三・四制打破」の試みは挫折していると思います。

結論を先にしましたが、高専制度開始後の変遷をたどります。学校教育法改正の翌年1962年に工業高専19校が開始（うち1校はすぐ廃止）、その後も継続的に設置されていきました。1967年には商船高専5校が、1971年には電波高専3校が加わり、2002年時点で国立高専55校、公立高専5校、私立高専3校となりました。当初、高専卒業生の95％程度が就職し、続けてより高度な学校教育を受けたい場合は大学に入学し直すことが多かったようです。この〝進路の閉塞性〟というべき状況は、1976年秋の技術科学大学2校の設置で解消されます。2校が高専から編入生を多数受け入れ始めたのに加え、他の大学も高専からの編入を認めるようになりました。1991年になると、高専卒業生に準学士の称号が授与され、また工業・商船・電波以外の学科（経営情報学科など）も設置されました。さらに同年から「専攻科」の設置が進められ、〝高専で学んだ科学技術の知識と技能をさらに深めて、より高度な技術者となる〟道が高専内に開かれました。専攻科修了生は大学評価・学位授与機構の審査に合格して学士の学位を受けることができます。専攻科設置は、高専の研究に対する意識を大幅に変えることになり、専門学科教員に博士号取得を求める動きが急進しました。現在では、採用においても専門学科では原則博士号を条件としています。2004年4月に「独立行政法人国立高等専門学校機構（以下、機構と略称）」が発足し、国立高専の運営に大きな影響を与え続けることになります。理事長、専務理事、職員60名強からなる機構事務局が中心（いわば本店）となり、各国立高専はその支店という立場で教育等を行うという体制が成立したわけです。この変革は形式的なものでなく、機構が示した目標に全国立高専が従い、予算も機構から配分されるという具体的内容を伴います。また、機構指導で高専の再編統合も進みました。機構が掲げた目標には、教育以外に研究、社会貢献、国際交流が含まれています。それまでも、高専設置基準に「高専は、その教育を学術の進展に即応させるために必要な研究を行うこと」とありましたが、ここに至って「研究」を教育と同程度の重みで追及できることになったわけです。ただし、高専教員の用務は、実習を含む教育、生活指導・寮務・課外活動指導を含む学生支援、社会貢献、及び国際交流と多岐にわたり、その多忙さゆえに研究に集中する余裕は極めて乏しいのが現実です。

高専制度の概略を急ぎ足で眺めましたが、学生の様子、企業からの具体的評価、入学志願者などについてご興味があれば、上記「技術者の姿」をご覧ください。大学との専門教育面の比較は「生成する大学教育学、京大高等教育研究開発推進センター編、ナカニシヤ2012」にごく少し記載しています。また「なぜ高専の就職率は100パーセントなの?、佐々木章太編著、文芸社2006」や「女子学生会長マッカーサー大戦回想記に目覚める、初田景都著、遊民社2010（これはモシドラの高専ロボコン版といえるフィクションですが、よく雰囲気が出ているという高専教員の評判です。）」も面白い読み物です。

会員寄稿

東北の復興と未来へ向けて

秋山康人
（昭57卒・東北支部）

昨年3月11日の東日本大震災から1年と数ヶ月が経過しました。

震災の当日は、仙台市内の勤務先である電力会社のオフィス11階におりましたが、地震が始まってからだんだんと揺れが大きくなり、次第に書類が床に散乱しだして立っていられなくなりました。これまでに経験の無い長く強い地震でした。揺れが収まったころには至る所、書類などが散乱している状況でしたが、片付ける間もなく、東北6県のほぼ全域で停電していることがわかりました。地震の直後は、送変電設備や発電所の被害状況について情報収集していたところですが、復旧を始める間もなく地震の約1時間後には巨大津波が沿岸部に到来し、東北太平洋側にある主力火力発電所がすべて被災し、発電できなくなりました。停電戸数は最大約466万戸になりました。日本海側の被災していない火力発電所を順次再起動させながら、**全国から応援もいただいて**懸命の復旧努力により3日後には約80％、8日後には約94％の停電を解消するに至りました。仙台

市の中心部にある我が家でも、2日間停電、10日間断水となりましたが、海岸からは距離があったので幸い家族と家屋の被害はありませんでした。

その他のインフラも大きな被害を受けました。仙台にある拠点製油所や周辺の主要油槽所が津波で被災し機能しなくなったことから、ガソリン類の流通がマヒし、どのGSにも長蛇の列が出来て何時間も順番待ちする日が暫く続きました。車が思うに動かせないことから道路は空いているものの物資が商店に届かないなど、物不足が続きました。今の日本は石油が無ければ全く機能しない世の中であることを、改めて痛感しました。

鉄道も地下鉄の一部区間のみ3日後に再開したのですが、線路とともに拠点のJR仙台駅が地震で天井が崩落するなど大きな被害を受け、仙台発着のJR線の一部で営業再開したのが震災から2週間以上たってからでした。今では、仙台駅周辺など地震による被害を受けた個所は震災前と変わらぬように復旧しておりますが、津波で被災した太平洋沿線の一部区間は未だ不通であり、復旧の目処の立っていない区間もあります。

さて、東北地方は復興に向けて着実に歩んでいるところです。震災直後は全体が自粛ムードだったのですが、5月になって「東北六魂祭」という催しが行われました。これは震災で犠牲となった多くの魂を弔い、元気を発信して復興への狼煙を上げるというもので、内容は東北三大祭りとして有名な青森県のねぶた祭、秋田県の竿燈まつり、宮城県の七夕まつりに加え、岩手県のさんさ踊り、山形県の花笠まつり、福島県のわらじまつりを一堂に集めて開催したものです。昨年の第1回目は仙台市で行われたのですが、2日間で36万人の来場者があり、危険防止のため一部、催しが中止となったほどです。やはり、祭りというものは人の心を結びつけ、元気をもらう効果が大きいものだと改めて思ったものです。そして、今年も第2回目が場所を変えて盛岡市で開催されました。

仙台平野の津波の被害について、平安時代の記録に貞観地震（西暦869年）の記載があるそうです。陸奥国で大地震が起き巨大津波の被害が大きかったと記されていますが、その後の津波堆積物調査などにより震源域が岩手県三陸沖から福島県沖にかけてのものと推定されています。この年ですが、京の都はじめ日本各地に疫病が流行していたことから、その退散を祈願して平安京の広大な庭園に当時の国の数66本の鉾を立て祇園の神を祭り、神輿を送ったとのことで、これが京都祇園祭の始まりとされています。その後では、江戸時代に慶長三陸津波（1611年）があり、多大な被害があったと記録されています。しかし、記述が非現実的にも思えたことや、実際目に付く所にその痕跡が見られないこと、また、明治以降の大津波である明治三陸津波（1896年）や昭和三陸津波（1933年）では三陸地方に甚大な被害をもたらしたものの、仙台平野の被害は少なかったことから、その昔の巨大津波の事実が語り継がれず、地域の防災に生かされていなかったと言えます。今回の津波を受けて原子力災害が発生したのですが、一方で、津波に耐えた原子力発電所もあります。女川原子力発電所には約13mの高さの津波が到来しましたが、その設計においては貞観津波と慶長三陸津波も調査しており、シミュレーションと合わせて敷地高さを決めた結果、今回の津波が敷地を乗り越えて建屋に侵入すること無く、3基のうち2基が通常運転中でしたが問題なく冷温停止することができたのです。

次に今回のような規模の津波が仙台平野や周辺に襲ってくるのは、何百年後になるかもしれません。その頃には原子力災害も収束し、津波の痕跡が全く分からなくなっていることと思います。私は貞観津波が祇園祭の始まったとされる年に発生していたことや、慶長三陸津波のことは震災後初めて知りました。東日本大震災を機に始まった東北六魂祭が祇園祭のように千年以上続くかわかりませんが、巨大津波の高さや内陸どこまで到達したかといった事実を、末代まで正確に伝えていくことが必要です。そのためにも、一部の専門家のみ目にする文献だけではなく、祭の言い伝えという形ででも広く一般レベルで情報共有することが必要だと改めて感じています。

茄子について

西　大輔（平22年卒・関西支部）

私は茄子が好物です。

煮ても焼いても揚げてもそれぞれ違ったおいしさがあり、旬である夏が近づく今日この頃、食卓に上がる機会が増えるのでは、と大変楽しみにしております。

ただ、旬とは言いましても、今やスーパーでは冬であろうと春であろうと茄子は並んでいますので、先日もつやつやとしたそれが3本袋入りで売られているのを目にしました。

安かったので袋をつかんだのですが、その袋に書いてある注意書きを見て私は大変驚きました。注意書きには、産地（熊本県産）や値段（98円）とともに、「ヘタにとげがあります。刺さらないようご注意ください」とあったのです。

これは私にとって、大きな衝撃でした。

新鮮な茄子のヘタにとげがあるのは当然のことです。卵の殻に「ぶつけると割れます。ご注意ください」と書いてあるようなものです。

私は茄子をそっと元の場所に戻してから家に帰り、この注意書きについて自分なりに検討しました。

そもそも注意書きとは、守らないといけないもの（お風呂洗剤・カビの除去剤と混ぜるな）、守った方がより良いもの（ゼリー・冷やしてお召し上がりください）、親切で教えるもの（ウエストポーチ・海外に行く際には服の下へ装着してください）、のおよそ3つに分かれるかと思われます。

そうしますと、茄子に刺があることは一般に知られており、また刺には毒があるわけでもなく、さらには必ずしも人の指等に傷を負わせるものでもないところ、定めし親切で教えてくれているものと思われます。

しかし、実際に茄子の刺が指に刺さったからといって、生じる損害は微々たるものです。にもかかわらず、その販売で利益を得ようとする小売店が、経費をかけてまで親切にも注意書きを付する理由はなんなのでしょうか？

昨今、消費者に対するこういった過剰に丁寧な対応が多いように思います。そしてそれは小売店に限らず、およその業種に共通する事態です。

基本的には、消費者と提供者は売買などの契約関係で結ばれているだけですので、例えば飲食店ならば、消費者が注文した商品を提供者が提供しさえすれば、消費者から代金を受け取る権利があります。消費者が入店した際に「いらっしゃいませ」と笑顔で迎えたり、「ありがとうございました」と頭を下げる必要はありません。お子様用に高いイスやスプーンを用意する必要も、冷え症の女性に膝掛けを貸し出す必要もありません。

しかし、なぜ多くの提供者が契約上は必要のないサービスを行うかと言えば、もちろん消費者に機嫌良くいてもらい、今後より一層の利益を得るためです。大将が無愛想でもどこよりもおいしいラーメン屋、に通う消費者は確かにいますが、愛想よい看板娘がいる定食屋、なら、どこよりもおいしいわけではなくても通う消費者は多くいるでしょう。それほどサービスとは、消費者との関係性において重要なものです。

よって、提供者としては、費用対効果を考えた上で可能な限りのサービスを重ね、消費者を招こうと考えますが、その長い積み重ねの結果、消費者は本来受けるべき商品の提供といった権利に加え、サービスまでもが受けて当然のものと考える傾向が出てきていると思われます。

つまり、A店で行っていることをB店が行っていないと、「A店はサービスが良い」ではなく、「B店はサービスがなっていない」と判断してしまいます。そして、行き届きすぎたサービスは消費者を傲慢にし、重箱の隅をつつき提供者側の揚げ足を取り、クレームを付けます。極端な消費者はクレーマーと呼ばれ、一般の消費者とはまた違った対応も取れるかもしれませんが、大なり小なりのこういった消費者の考え方は提供者にとって非常に頭の痛い問題であり、特に昨今はインターネットの普及に伴い悪評がすぐ広まることから、提供者側に落ち度がなかったとしても、おちおちしてはいられません。

現状を逆手に取り、「サービスが少ない代わりに安い」を売りにしている業務用スーパーやLCC航空会社なども人気だと聞きますが、あくまでも「サービスの少なさ」と「安さ」を天秤にかけた結果の人気であり、当然ながら「サービスが良くて安い」に勝てるものではないでしょう。

そして多くの提供者は当然に理解していることではありますが、最近起こった格安高速バスの事故の例もあり、「安全」と「安さ」は天秤にはかけられないものであることから、提供者は「サービスが良くて安くて安全」という難しい問題に挑んでいくこととなります。そして実際に、業務用スーパーの小売価格と大手スーパーの小売価格には、大手スーパーの身を切るような「営業努力」により、そこまで多くの差はなくなってきているようにも思います。LCC航空会社の飛行機には乗ったことがないので何ともいえませんが、こちらはニュースで見る限り、サービスに慣れた私たちにはなかなか難しいシステムのようです。「サービスが少ない代わりに安い」を了承して契約したはずの消費者でも、納得がいかない様子であるのを同じニュースで見ました。

つまり、提供者からちやほやされ、まさに「神様」のように扱われた消費者は、価格やサービスを基準に多くの選択肢の中から慎重に比較考量し、自身にとって最も有利だと思われる条件で契約するため、少しでも問題が生じると我慢がならなくなってしまっているのでは、と思います。

以上の現状を踏まえ、なすに立ち戻りますと、「ヘタにとげがあります。刺さらないようご注意ください」との注意書きは、通常一般的に期待される注意義務を果たさなかったがためになすの刺が指に刺さった消費者が、スーパーに対して「そちらが注意してくれないから指を怪我したじゃないか」とクレームをつけ、さらには針小棒大にインターネット上で言いふらし、それによって店に不利益が生じることを避けるための措置だと考えられます。スーパーに哀れを誘われる事態です。

提供者と消費者、つまり「お客様」の関係では、提供者は一般的に不利です。「お客様」が提供者にもたらす利益があってこそ、提供者側が生活できているのは確かですが、その場面では「お客様」である消費者も、別の場面では提供者でありうることから、社会的な活動から生活の糧を得ているのは双方同じです。互いに等しく人間である以上、礼儀を失ってはならず、お互いを尊重し、常識を持って接してこそ、気持ちの良い関係性を構築できるのであり、自身の利益ばかりを追求していては、気がついたときはクレーマーと成り果てているのでしょう。

検討を終え、今後もたとえ店員さんとのやり取りの少ない牛丼屋での食事の後でも、その価格の安さを実現した営業努力に敬意を表し、「ごちそうさまでした」の一言は必ず言おう、と心に留めましたところで、一息つくために冷蔵庫を開けたところ、野菜室にへたに刺のついたなすが入っているのを発見しました。メニューはわかりかねますが、どうやら今夜の夕食にはなすが出てくる模様です。

憧れの「ちょっと沖」へ

藤山　徹
（平9年卒・中国支部）

私の趣味は釣りです。これまでは渡船で磯に渡り、チヌ（黒鯛）

を狙ったり防波堤からメバルを狙ったりしていましたが、今年の春、こんな私の釣りライフに最大の転機が訪れました。小さなボートを購入したのです。

きっかけは、今年の5月、知人から持ちかけられた魅力的な話でした。「中古のボートを手放したいんだけど、買わないか？」

小型船舶の免許も持っていない私は少し躊躇しましたが、よくよく話を聞いてみると免許のいらない小型ボートとのこと。平成14年の規制緩和により、船の長さ3・33m未満、エンジン2馬力以下のボートであれば、船舶免許がなくても誰でもボートの操船ができるようになっているのです。

陸から釣りをしていて常々思うのが、「あのちょっと沖にはどんな大物が潜んでいるんだろう？」ということです。力の限り竿を振り、仕掛けを投入してもせいぜい100m程度まで。決して手の届かないちょっと沖には常に憧れがありました。若気の至りですが、学生の頃には「ちょっと沖」への思いを抑えきれず、竿と簡単な釣り道具を背中に担ぎ、クーラーを浮き輪代わりにして砂浜から数百メートル先の岩場へ泳いで渡って釣りをしたこともあります。これまでボートを所有するなんて夢のまた夢、仮に買えたとしても日頃のメンテナンスのことを思って二の足を踏んでいたのです。

今回話があったのは空気を入れて膨らませるインフレータブルボートというもので、車載時、収納時は小さく畳んでおき、海に出る際に膨らませるものです。全長2・7m、幅1・5mの4人乗り、重量は42kgで畳んだ大きさは1m×2m程度。何とか1人で抱えられる大きさです。エンジンの方は4ストローク空冷式の2馬力。乾燥重量が13・5kgと、こちらは片手で提げられる重さです。新品で買えば一式20～30万円程度ですが、格安で譲ってもらえるとのこと。「はい、買います！」と即答したい気持ちをぐっとこらえ、その日は（一応）家族と相談することにしました。

家に帰り、早速妻に相談したところ、突拍子もない話に驚き、話せば話すほど怪訝な顔になっていったため長丁場は不利だと感じ、子供たちを味方につける作戦としました。「どこでも好きなところに行けるし、魚もいくらでも釣れるよ！」と誘いをかけてみましたが、予想に反して帰ってきた言葉は、「う～ん、ちょっと怖い」。収納場所等の問題もあり、家族との交渉は難航を極めましたが、最後は拝み倒して何とか説得に成功したのでした。

ボートを引き取りに行ったのは今年の4月。その足で譲ってくれた知人と共にボートを車に積みこみ、いざ海へ進水式を兼ねた釣りに出かけました。

当日は晴天、凪とボート初心者には絶好の好天に恵まれました。電動ポンプで空気を注入し、20分程度で準備完了。これは慣れてくればもう少し短くなるかもしれません。釣り道具一式を積み込み、漁港のスロープから海に降ろしていざ出港です！ 2馬力なのですがにスピード感には乏しいのですが、スモールボートならではの海面に近い視線、頬に当たる海風がとても心地よい感じです。30分近く走り、これまで憧れであった「岩場からちょっと沖」でエンジンを停止。一切の音が止まり、ボートの下で波がちゃぷちゃぷとリズミカルに音を立てています。しばし感慨にふけった後、いよいよ竿を出して釣り開始です。アンカーを降ろさず、船を流しながらキスを狙ったのですが、これが面白いほど釣れる。しかも型揃い。憧れのちょっと沖は私を裏切ることなく、期待に応えてくれました。日没後は、これまた行けそうで行けない、ちょっと沖の一文字波止に渡り、メバルを狙いました。こちらも短時間でしたが、30cm近い大物を数匹釣り上げ、軽々と自己ベストを更新したのでした。

実は「船に酔いやすい」という、釣り師にあるまじき弱点を持つ私。船上での釣りを少し心配していましたが、アドレナリンのせいか心配された事態も起こらず、満足のいく進水式と初釣りを終えたのでした。

その後、何度かの出船で少し自信をつけた私は、少し腰の引けた家族を半ば強引に連れ出し、妻と子供2人の4人で釣りに出掛けました。世界遺産の厳島神社を横目に見ながら宮島周辺で釣りを開始。今回も食べておいしいキスを狙ったのですが、結果は10cm程度のハゼが2匹という惨憺たる釣果。子供達からは「陸からの方がよく釣れるんじゃない？」とダメ出しをされる始末でしたが、妻も含め、初めてフェリー以外の船に乗った喜びはひとしおであったようで、皆何とも良い笑顔をしており、何とかわがまま親父の面子は保てたようです。

まだ数回の出船で満足の行く釣果を得ていませんが、小さなボートは私の釣りライフに確実に新たな息吹を与えてくれました。「釣り竿とは一方の端に釣り針を、他方の端に、馬鹿者をつけた棒である」という諺がありますが、家族や気の置けない友人と馬鹿になって釣りをするのは私にとってかけがえのない時間です。ボート購入により活動エリアを格段に広げた今、日頃のストレス発散も兼ね、末永く充実した釣りライフを過ごしていきたいと考えています。

同窓会だより

卒業55周年記念クラス会

先ず私たちの洛友32会（昭和32年卒のクラス会）をご紹介します。

卒業の年の暮れに第1回クラス会を大阪で開き、以降5周年ごとに京都にて開催してきました。40周年以降は、間に1回追加することになり、今回は16回目となりました。

この10年余の洛友会報の「同窓会だより」には卒業55周年記念会は散見されます。しかし驚くべき

記事を見出しました。昭和13年組が卒業60周年記念会を17名（内夫人7名）で開催した（山本健様の記事、平成11年1月号）、昭十会が卒業65周年記念会を13名（内同伴4名）で開催した（和田寿太郎様の記事、平成12年8月号）です。

元気溢れる私たち洛友32会も5年後には必ずや卒業還暦記念会を盛大に開催したとの寄稿をさせて頂きます。

前置きが長くなりました。今回の参加者は夫人11名を含み38名でした。

4月24日、快晴に恵まれて府立植物園にあふれる新緑、満開の八重桜、枝垂桜、チューリップを楽しみ、隣の陶板名画の庭で高山寺の鳥獣戯画、ダヴィンチ、ミケランジェロ、印象派の名画などを鑑賞しました。

懇親宴会場は後水尾法皇ゆかりの由緒ある黄檗宗の尼寺、閑臥庵です。美しい庭を眺め、禅寺の伝統を発展させた京懐石普茶料理を賞味しました。

般若湯、麦般若、焼般若を重ねるほどに意気大いに高まり、次次回60周年記念会をどのように盛り上げるかとの気運になっていました。

恒例の洛友会の歌、琵琶湖周航の歌を高唱して宴を終えました。

翌25日は二つのコースに分れます。

見学コースでは世界遺産二条城見学と、幸いな機会を得て西本願寺の数々の国宝を身近に鑑賞することが出来ました。

他はゴルフ東西対抗戦コースです。東海、関東チームと関西チームが毎年競っています。クラス会の年は京都ゴルフで開催します。過去の勝敗は拮抗していますが今年は東に軍配が上がりました。

盛りだくさんのメニューを楽しみ、洛友会の歌の歌詞「また会う日まで強く生きなん」を胸に再会を約しました。

（西台　惇　記）

卒業50周年記念同窓会

昭和38年電気・電子工学科卒業50周年記念同窓会を、元気で楽しく集える内にと1年早めて、本年5月9・10日の両日、多様な企画を盛り込んで開催しました。50周年と言うことで多くの参加者があり、ピークの宴会時には38名、卒業生のほぼ半数が集い楽しく交歓し、非常に盛況でした。

初日午後は先ずは勉強会で、京大時計台記念館・国際交流ホールで、同級生の森詳介関西経済団体連合会会長（関西電力株式会社取締役会長）から、「関西を面白い地域に」と題して、関西圏の重要性、関経連の取り組み、特に「うめ北」開発や人材育成の方策などを含む有意義なお話を伺いました。

その後学内見学他を含めて、三々五々に宴会場のウエスティン都ホテル京都に向かいました。

18時より宴会を開催し、速水和夫君の司会進行で、西村登努志代表幹事挨拶、前回の杉本錦司代表幹事の乾杯発声の後懇談し、銘々1分間以内の近況報告を行いました。会社の要職にある方、直近にベンチャービジネスを起業した方、新しい研究領域の創成に参加する方、また趣味の世界に独自の境地を開く方々など、多方面に亘って活躍し或いは日々を楽しんでいることが披露され、慶賀し合いながら楽しい時間を過ごしました。次回幹事紹介の後、村井真一君の指揮で「琵琶湖周航歌」および「逍遙歌」を斉唱の後お開きとしました。

翌朝は学習目的の見学ツアーで、快晴の下で教養部1回生時代を過ごした懐かしい宇治キャンパスを訪問しました。当時からはすっかり模様替えされた先端研究所群の内で、次世代エネルギーの見地で、宇宙太陽発電所からの電力送電のためのマイクロ波エネルギー伝送実験装置（電波暗室）を、生存圏研究所・篠原真毅教授から、核融合実験〝ヘリオトロンJ〟装置他を、エネルギー理工学研究所・長崎百伸教授から、また直近の重要課題である地震対策研究のための強震応答実験室を防災研究所・川瀬博教授からご説明を頂き、現在なお向学心旺盛な参加者から熱心な質疑が呈されました。

昼は、〝花やしき浮舟園〟で宇治川の景観と昼食を楽しみました。午後約1時間平等院を拝観し、15時半頃、「次回も美味しい料理が楽しめるよう是非とも元気で集おう・・・」と祈念しながら、京都駅南口にて散会しました。

田淵　義彦　記

支部だより

関西支部総会報告

平成24年5月20日（日）、京都タワーホテルにおいて、関西支部総会が50名の参加を得て開催され

ました。また、総会に先立ち、「進化を続ける情報通信」と題して講演会を開催しました。講演会では（株）国際電気通信基礎技術研究所の平田康夫社長（昭和40年卒）より、情報通信発展の軌跡からクラウド・スマート・ソーシアルなどがキーワードの最近の動向、今後に向けての最前線の研究事例などをお話いただきました。初の日米間テレビ宇宙中継のビデオ映像なども織り交ぜていただき、参加者にとって大変興味深く、また懐かしさも感じることが出来た講演会となりました。

支部総会は福田総務幹事の司会のもと辻村支部長のご挨拶で始まりました。各幹事または補佐から平成23年度事業報告および決算報告があり、また平成24年度事業計画および予算編成ならびに平成24年度関西支部役員改選について審議され、満場一致で承認されました。平成24年度の新役員は、

支部長　丹羽　彰（昭48年卒）
副支部長　西　亨（昭49年卒）
総務幹事　則竹博安（昭56年卒）
会計幹事　市橋国之（平3年卒）

の各氏です。

本年度は本部総会と同時開催であり、多数の本部役員、関西以外の各支部役員の方々にも支部総会にご出席いただきました。また、ボーカロイド・ソフトで作成された「洛友会の歌」のCDを松重先生から出席者全員に配布いただきました。

支部総会に続いて開催された本部総会では、定例の事業報告・事業計画の承認といった議題に加え、洛友会創立60周年記念会報の発刊などの計画についてもご説明いただきました。

総会終了後は引き続き懇親会が開催されました。副会長の松重先生のご挨拶の後、松田副会長に乾杯のご発声をいただきました。懇親会中には、遠方から参加いただいた、中山北海道支部長、深堀九州支部長から各支部の活動の様子もまじえてスピーチをいただきました。

終わりには、西台様に先導いただいて「洛友会の歌」を全員で斉唱し、最後に新幹事長に就任なされた荒木先生より締めのご挨拶をいただいて散会となりました。

一木将人（平7年卒）記

中国支部総会報告

平成24年5月25日（金）ANAクラウンプラザホテル広島において第59回目となる平成24年度洛友会中国支部総会を開催しました。総会には本部から長尾真会長、教室から佐藤高史先生をお迎えし、中国地方各地から、今年中国支部へ加入された新卒の方を含めた28名の会員のご参加をいただき、盛大な総会となりました。

総会は、開会にあたり松井支部長からご挨拶をいただき、引き続いて支部事務局から支部会員異動状況、支部活動状況を報告、会計決算、予算案、支部役員の改選案、支部会則の改正案について説明・提案を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。

平成24年度　洛友会中国支部総会　平成24年5月25日　於 ANAクラウンプラザホテル広島

続いて長尾会長から洛友会本部の近況について、また、佐藤先生から大学の近況について、それぞれお話しいただき、予定どおり全ての議事を終了しました。

総会終了後、記念撮影を行い、昭和28年卒業の池内先輩のご発声により支部恒例の懇親会を開始しました。支部会員の思い出話、近況報告等々、終始和やかな談笑の中で大いに懇親を深めながら会は進み、昭和30年卒業の秦先輩のご発声で支部懇親会をおひらきとしました。

平岡　正憲（平10年卒）記

四国支部総会報告

平成24年6月1日（金）、高松市内の「JRホテルクレメント高松」において、第57回洛友会四国支部総会が開催されました。

総会は、本部から長尾真洛友会会長、教室から藤田静雄教授にご出席いただき、四国内からは会員29名の参集を得て、四宮四国支部長（昭和41年卒）の挨拶で始まりました。

次に、長尾会長から、洛友会の役員改選や会費納付状況など、洛友会の運営状況についてお話しいただきました。また、藤田教授からは、吉田キャンパスの様子、電気系教室の近況、昨年度の就職状況などについて詳しいご説明があり、現在の大学生気質の感想なども交えて大学の今の様子を伺うことができました。

第57回洛友会四国支部総会　平成24年6月1日 於 JRホテルクレメント高松

その後、宮本先輩（昭和60年卒）から四国地域におけるこの夏の電力需給について、幹事からは定例の会計報告、予算案の説明がありました。また、支部役員の改選について審議を行い、満場一致で承認され、新役員を代表して今岡新支部長（昭和42年卒）より就任の挨拶がありました。

総会終了後、懇親会が富田先輩（昭和23年卒）の乾杯音頭で始まりました。先生方や久し振りの

友人と酒を酌み交わしながら歓談しているうちに、あっという間に予定の時間となり、最後に恒例となっている「逍遙歌」と「琵琶湖周航の歌」の大合唱で会を締めくくりました。

翌日は、長尾会長、藤田教授を四国電力の新鋭ＬＮＧ火力である坂出発電所にご案内し、発電所長を務めている安藤先輩（昭和53年卒）の説明により、夏場の安定供給に万全を期している状況をご視察いただきました。

藤野盛夫（平8年卒）記

洛友会東北支部総会報告

平成24年6月2日（土）、仙台市内の「ホテルモントレ仙台」で平成24年度東北支部総会が開催されました。本部より木村磐根先生の御出席をいただき、東北支部からは5名が出席しました。

総会は、井上支部長のご挨拶で始まり、議事では、23年度決算報告、24年度予算案について幹事より説明があり、参加者全員の一致で承認されました。続いて本部役員会報告の後、木村先生から洛友会発足60年の本部活動の経過と出来事、および、電気系教室の近況についてお話しいただきました。なお、木村先生より今年で洛友会幹事長を交代されたとのお話しがありましたが、長年のご苦労と何度も東北支部総会にご出席いただきましたことを感謝申し上げる次第です。また、昨秋の叙勲で、旧支部長の東北大学名誉教授大家寛先生（昭和34年卒）が瑞宝中綬章を受章されたことの紹介とともに、大家先生から叙勲の当日の受章者を代表して皇太子殿下に答礼されたときの緊張した様子のお話もありました。

総会後には懇親会を行いました。一年振りに顔を合わせた者同士で、各自の東日本大震災当日の様子と近況、学生時代の研究テーマやお世話になった先生の思い出の話、また、エネルギー問題と原子力の未来など、自由な雰囲気で議論に花が咲き、あっという間に予定の時間となりました。来年の総会での再会を約して散会となりました。

秋山康人（昭57年卒）記

北陸支部総会

平成二十四年六月二日（土）金沢市の「金沢　石亭」において、平成二十四年度北陸支部総会を開催しました。本部から荒木光彦先生、教室から篠原真毅先生をお迎えし、合計二十名の出席がありました。

支部総会前には、例年同様、講演会を開催しました。今回は篠原先生に「持続可能な生存圏のための宇宙太陽発電所ＳＰＳ研究」と題し、宇宙太陽発電所（ＳＰＳ）、すなわち、昼夜・天候に無関係の安定大規模自然エネルギーとして利用可能な発電システムについて、講演していただきました。ＳＰＳの実用化のためには、巨大なソーラーパネルを宇宙空間に打ち上げること以上に経済的かつ確実に、いかに発生した電力を地球上に伝送し、受信できるかが重要との認識を持ちました。技術的なハードルが沢山あるようですが、この発電システムが実現すれば、地球上のエネルギー・環境問題は大きく改善の方向に向かうはずであり、非常にロマンのある講演内容でした。

支部総会では、冒頭、松木支部長より、今回の総会出席者は二十名と昨年度より大幅に増え喜ばしい、今後も北陸支部総会を盛り上げていきたいといった挨拶がなされました。引き続き、荒木先生よりご挨拶をいただき、その後、本部の近況等についてお話がありました。洛友会六十周年企画、名簿の電子化などについてご説明がありました。

次に、篠原先生より電気系教室の近況についてお話がありました。桂キャンパスの様子、教員の方々の異動状況、博士前後期連携プログラムのほか、卒業生の進路の状況についてご説明をいただきました。

最後に、支部幹事から支部近況報告、会計報告、支部役員改選に関する議案を説明し、満場一致で承認されました。

総会終了後、懇親会を開催しました。懇親会は、松木支部長のご挨拶、西村顧問の音頭による乾杯で幕を開け、先生方や先輩・後輩、あるいは友人と酒を酌み交わして歓談し、楽しいひと時を過ごしました。最後に琵琶湖周航の歌を合唱し、中島顧問のご発声のもと、万歳で散会となりました。

（中村智和　記）

改選された支部役員

顧　問　森本芳夫（昭16）
　　西村尚和（昭23）
　　野村精二（昭24）
　　中島恭一（昭40）
支部長　松木純也（昭44）
副支部長　宮越政通（昭41）
　　久和進（昭47）
評議員　金森閲治（昭40）
　　柴田明（昭40院）
　　西念勉（昭46）
　　安達正利（昭46院）
幹　事　野村保之（昭52）
　　長谷川俊行（昭54）
　　中田和男（昭63）
（新）長谷川慎治（平6）

第97回関西支部ゴルフ競技会報告

〈プレー状況〉

第97回関西支部ゴルフ競技会が平成24年5月19日（土）武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は天候に恵まれ、アウトは福川氏（昭和30年卒）、インは細田氏（昭和36年卒）の始球式でプレーを開始し、合計23名（うちシニア10名）が競技に汗を流されました。

結果は以下のとおりです。

（シニアの部）

優勝　北野　徹　（S44年卒）
2位　田中　光雄　（S38年卒）
3位　細田　純一郎（S36年卒）

（一般の部）

優勝　西　亨　（S49年卒）
2位　杉本　卓　（S50年卒）
3位　大澤　靖治　（S44年卒）

〈懇親会〉

プレー終了後、福田氏（S57年卒）の司会により、表彰式兼懇親会が開催されました。

表彰式では、入賞者に景品および優勝カップが手渡されたあと、入賞報告を頂くとともに、関西洛友会ならびにゴルフ競技会の更なる発展を期待するコメントを頂きました。

〈お知らせ〉

洛友会関西支部では同窓生の懇親を深める機会として毎年2回（春・秋）にゴルフ競技会を開催しております。次回は平成24年10月20日（土）を予定しております。若い方も含めて、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

〈連絡先〉

関西電力株式会社
福田　隆　（S57年卒）
小蒲　義夫　（H17年卒）
連絡先
050−7104−0924（小蒲）
ogama.yoshio@b3.kepco.co.jp

中国支部　第16回ゴルフコンペ

中国支部では、平成24年5月26日（土）広島佐伯カントリー倶楽部（広島県廿日市市）にて第16回ゴルフコンペを開催しました。

年1回の恒例行事となっている当ゴルフコンペも今回で16回目となり、10名の会員にご参加いただきました。

大会当日は好天にも恵まれ、参加者は優勝を目指して真剣に、かつ楽しく和やかにプレーを満喫でき、プレー後の表彰式を兼ねた懇親会でも大いに盛り上がりました。

今回の優勝者は、グロス、ネットともにトップの素晴らしいスコアを記録された大森　乾司氏（昭和45年卒）、第2位は、グロスでは優勝者と同スコアでトップだったものの、ハンデの差で惜しくも優勝を逃した牧　征滋氏（昭和38年卒）、第3位は高橋　昭彦氏（昭和58年卒）でした。また、その他の参加者も、ニアピン賞、ドラコン賞等を獲得し、大変充実した大会となりました。

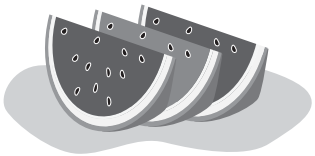
当支部のゴルフコンペは恒例行事としてさらに充実していきたいと考えていますので、多数ご参加をいただきますようよろしくお願いいたします。

達田　政志（平12年卒）記

訃報

昭9	市村　宗明	23・11・18
昭10	清水　威寛	24・6・2
昭14	河原　廣吉	24・1・21
昭15	上田　武夫	10・24
昭17	珠玖　泰吉	24・6・4
昭20	小原富重郎	24・4・1
昭26	村尾　博	
昭27	大西　俊一	23・12・8
昭28	小刀　一晃	23・3・27
昭31	向田　厖	24・2・8
昭32	数川　邦敏	24・5
昭32	櫻田　武	24・2・25
昭50	園井　康夫	23

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

本年5月の総会をもちまして、事務局が交代しました。2009年から3年にわたり、事務局を務められた鈴木実教授（電子工学専攻）に代わり、高岡義寛教授（電子工学専攻、桂キャンパス）と高橋（情報学研究科通信情報システム専攻、吉田キャンパス）の2名が務めます。洛友会報のバックナンバーは鈴木先生のおかげで、洛友会ホームページ（http://www.rakuyukai.org/）で閲覧することができるようになりました。鈴木先生の長年のご尽力にお礼申し上げるとともに、今後の会員皆様のご協力をお願いします。